決裁	議長	局長等	次長	リーダー	担当	合議	
	西田		西田			中	井上

令和４年７月30日

養父市議会議長　様

養父市議会議員　　淨慶　耕造

政務活動概要報告書

政務活動の概要を下記の通り報告します。

記

1　活動月日　　令和４年７月29日（金）午後７時～９時40分

2　活動場所　　養父公民館視聴覚室

3　活動者氏名

代表者　淨慶　耕造

議員参加者　藤原芳巳　西垣司　足立隆啓　瀬原敬樹　田路之雄

中島恵子　勝地貞一

4　活動内容

「7.29農業を語る懇談会（農と食をつなぐ養父市農業フォーラム）」の開催

市内１３人の農業者と各会派から市会議員８人が集まった。

たじま農協石井淳氏から養父市の農業の実態と、スマート農業について自治体と協働のJAの取組みを話してもらった後、農業者同士の意見交換や、自らの農業の展望や市の農政への要望などを語ってもらった。

5　活動成果

①　目的

コロナ禍、中国の爆買い、異常気象、ウクライナ紛争というクワトロ（4つ）ショックに見舞われ、世界は食糧危機の様相を示している。今後、国内農家への肥料供給が見通しがたい中で、養父市の農家が、どのような困難を抱え、どのような展望を見出そうとしているのか。車座の意見交換を通じて市政への反映の道を探る。

②　内容（詳細）

農家代表の橋本幹夫氏のあいさつの後、話題提供としてJAたじま営農

受付 第 号 4.8.-1 兵庫県 養父市議会事務局

生産部副課長の石井淳氏が養父市の農業についてプレゼンを行った。
養父市の農業人口（販売農家）は719人、うち606人が65歳以上。75歳を引退とすると10年後には、113人となってしまう、と厳しい現状を報告。労働力不足を補うためにも、養父市と協力してスマート農業の実証実験を行っているとして、ドローンによる播種、アクアポートによる水管理やアシストスーツなどを紹介した。
議員側からは令和4年度の農業予算の説明を行った。
農業者の自己紹介と意見交換では以下のような意見が出た。

・大屋高原有機野菜の歴史と現在の課題
　集荷所の老朽化。農業雇用のむつかしさ。
・アイガモ農法と自家栽培飼料による畜産を通じて、子どもたちが帰ってこられる故郷を残す。
・貸借した荒廃農地を開墾して農地に戻したが、特区事業者に渡されてしまった。国家戦略特区であっても地元農業者が最優先ではなかったのか。
・7年前に移住して有機農業に取り組んでいる。地元農業を守ってきた農業者を尊敬している。有機と慣行が分断されないように。
・有機の学校で学んで就労した。販売先のサポートが欲しい。
・子どもたちの健康な生育のためには安全な食べ物は必要だ。学校給食に有機野菜を使うことを求めて市に申し入れをした。大きく動き始めた。
・養父市の水田はかっては1600haあったが今は709haだ。農地を守るには稲作しかない。農業振興と農地を守ることは別のこととして考えなければならない。
・養父市は自然が豊かかと言えばそうではない。山林の下草はシカの食害にあい、蝶々も飛ばない。せめて柵で囲っている農地は守ろうと思っている。
・1980年にUターンして就農した。1反2畝の農地を200万円で購入した。その後養鶏にも取り組んできた。うまくいかないこともあったが、雇用した移住の若者が農業者として独立したのは誇りだ。
・営農組合を作って5haで稲作を行っている。作付けをするのに100万円の初期費用がかかるが、終わったときに回収できない。5年先が不

安だ。

・８棟のハウスで青ネギと水菜を特別栽培と無農薬で栽培している。コープこうべに出荷している。

・コープの青ネギ部会の復活をしてほしい。

・息子が後を継いでくれて喜んでいるが、まだまだ手が抜けない。養父市の農業をどうしていったらいいのか、考えるが結論が見えない。たじまんま（和田山）に養父市の農家１１６名が出荷している。燃料代も高騰している。養父市で販売できないか。

・大雪でハウスがつぶれた。もうあきらめて復旧しない、という人が出てきている。

・娘は小学校６年生の時市の「有機の学校」に１年間出席した。今工専で学んでいるが、韓国の有機の学校給食の取組みについて論文を書いた。その中で韓国が保田先生の有機理論に影響を受けていると明らかにしている。儲ける農業も大事だが、農作物は土からできており、人間の体は食べ物でできていることが根本だ。

・減農薬・無農薬の取組みは大事だが、一足とびにはいかない。現実の農業を維持する努力も大切だ。

・30 年前にペーパーマルチで稲の無農薬栽培に取り組んだ。一方で 43 枚の小さな田んぼをどう守るかという課題も持ちながら農業をやってきた。

・肥料・飼料・資材の高騰で農家は苦しんでいる。議会はどのように農民の声を反映するつもりか。

③ 成果

参加者は移住して新規就農を果たした 30 代の若手から中堅、ベテランに至るまで多彩な農家が参加した。農家同士の意見交換や交流は、認定農業者の会などを除けばほとんど行われていなかった現状を見れば、時宜を得た企画となった。

比較的若い農業者は有機農業に取り組んでおり、食の安全について高い意識を持っていた。就農にあたっては市の有機の学校が果たしている役割が大きく、県下で最も早く着手したこの取り組みが、地下水脈となって広がっていた。運営委員のスタッフの皆様には深く敬意を表したい。一方ベテランの農業者の最大の関心は、耕作放棄地を作ら

ないこと、にあるように思えた。「田畑を荒らすな」というのは先祖からの声であり、農業者の誇りでもあることがうかがえた。しかしそれだけに、体力を考えれば苦しい戦いである。
若い農業者にとって、販路の問題は常に付きまとっている。直売所、農協いずれも十分な役割を果たしているとは言い難い。しかし市はこの問題を解決する手段を保有していることを指摘しておきたい。

出されて交換された意見は結論が出るものではないが、今日の養父市の農業が抱える課題を相当程度明らかにしたものと考えることができる。
参加議員の一人ひとりにとって、農業政策を考える貴重な経験となった。

以上